

医療ソーシャルワーク実習指導におけるグループスーパービジョン —リフレクティング・プロセスを用いて—

まつもと ようこ やまもと ひろゆき
松本葉子 山本博之

〈要 旨〉

本研究は、医療ソーシャルワーク実習指導において実施するグループスーパービジョンに、リフレクティング・プロセスを用いた参加型アクション・リサーチである。リフレクティング・プロセスは、精神科領域や家族療法の場面で使われてきているが、医療ソーシャルワーク実習指導に用いられたことは管見の限りはなかった。ソーシャルワーク教育では他者の多様な視点や価値観を取り入れ、必ずしも問題解決のみを目的としない相互支援・相互教育が大切である。また正解のないソーシャルワーク実践において専門家が内的省察を深める反省的实践家(reflective practitioner)であることは当然の責務である。本研究では、医療ソーシャルワーク実習へ行く学生のグループスーパービジョンにリフレクティング・プロセスを取り入れ、通常のグループスーパービジョンの話し合いとの違いを学生の目を通して明らかにし、リフレクティング・プロセスを用いることで学生の「省察性」が深まるのか検証し、実習指導への応用可能性を検討する。

〈キーワード〉

医療ソーシャルワーク実習指導, グループスーパービジョン, リフレクティング・プロセス, 参加型アクション・リサーチ, 省察性

I. はじめに

ソーシャルワーク実習教育では、学生個々の特性と力量を見極めて指導を行うが、そこにはあらかじめ用意された正しい答えがあるわけではない。そのため、その都度学生に合う指導を模索し、プロセスリコードやインシデント法、FKモデルなどを用いて指導を行ってきた。一般的なグループスーパービジョンの話し合いにおいても学生はそれなりの気づきや示唆は得られるが、学生それぞれの発言頻度や発言内容には差がある。さまざまな価値観に照らし合わせながら自分自身の体験

や考えを自己に落とし込む作業が本当の意味でできているのか悩ましい。

正解のないソーシャルワーク実践において専門家が内的省察を深める反省的実践家(reflective practitioner)であることは当然の責務である。とくに生老病死を取り扱う医療機関で生きづらさを抱える方々の支援をする医療ソーシャルワーク(以下、MSWとする)実習へ行く学生は、自分自身を肯定しながらも多様な意見を取り入れるべく、グループスーパービジョンのプロセスの中で「省察性」を取り入れる必要がある。「省察性」とはナラティブ・アプローチにおける概念であり、本研究では「自己との対話と他者との対話を交互に体験することにより、自分自身の考えや意見を見つめなおす」と定義する。まずはナラティブ・アプローチの一つとして紹介されているリフレクティング・プロセスについて整理していきたい。

1. ナラティブの潮流であるリフレクティング・プロセス

(1) ナラティブ・アプローチとは

広義のナラティブ・アプローチには①マイケル・ホワイトとデビット・エプストンのナラティブ・セラピー、②ハロルド・グーリシャンとハーレン・アンダーソンの会話モデル、③トム・アンデルセンのリフレクティング・プロセスの3つの大きな流派がある¹⁾。ナラティブ・アプローチは1990年代に心理療法師が生み出した支援方法の一つであり、「人々が現実と認識しているものは社会的に構成されたものであり、社会は人の心や感情の中で形作られるもので、絶えず変化しており人々の認識や解釈によって現実そのものが再生産される」という社会構成主義の応用から生まれた。会話の中で意味が構築され、個人の語りが現実を作っていく。そして現実はその相互作用の中で生成されるという観点に立脚している。もともと①のナラティブ・セラピーはPTSD(外傷後ストレス障害)やトラウマなどで苦しんでいる方に対する心理・精神療法の一種で、クライアントに過去のストーリーを自由に語ってもらい、認知・情緒・行動を変え、新たな物語を再構築してもらうことで社会生活に支障をきたしている症状を取り除いたり心の健康を回復したりする治療法である。そこでは治療者とクライアントは対等の立場であり、クライアントを支配している苦しいストーリーを新たなストーリーにクライアント自身が編集しなおすことを目指している。治療者は「無知の姿勢(not knowing)」に基づき、クライアントと治療者が共同の関係性を保ちながらクライアントのなかで確立しているドミナント・ストーリーを何度も語る中で解体し(問題の外在化)、新たなオルタナティブ・ストーリーを生成する「治療的対話」に主眼がおかれる。このようにマイケル・ホワイトらのナラティブ・セラピーではクライアントの苦しみのストーリーを書き換えることに重点が置かれるが、グーリシャンらの会話モデルやアンデルセンのリフレクティング・プロセスでは「今、ここで」の会話の幅を広げ、意味や解釈の多様性と自己の振り返りに重点を置く違いがある。②のアンダーソンはアンデルセンのリフレクティング・プロセスとも相互に影響しているコラボレイティブ・アプローチとして「アズ・イフ・ワーク」というワークを提唱した²⁾³⁾。「アズ・イフ・ワーク」はリフレクティング・プロセスを含有したワークであり、他者の経験をよりリアリティを持って体験することを目的に、アズ・イフの立場でのリフレクションについて

話し合う。そこでは話題提供者だけでなく、参加している全員が自らの考えや知識を振り返り、互いをリフレクトすることで事実以上の学びを得ることが期待できる。

(2)リフレクティング・プロセスとは

リフレクティング・プロセスとは、ノルウェーの精神科医であるトム・アンデルセンにより家族療法の領域で提唱された方法である。1987年米国のFamily Process誌にトム・アンデルセンのThe reflecting team : Dialogue and meta-dialogue in clinical workという論文が掲載され、ミラノ派や解決志向アプローチのシェザーやグーリシャンらとともに90年代の家族療法を牽引していく実践方法となった⁴⁾。従来ミラノ派型の家族療法の面接場面では、相手から見えないワンウェイ・ミラー越しに専門家チームが本人・家族・担当支援者の面接場面をミラーの後ろで観察しながら自由に見立て、自分たちが良いと思う方法を考え、面接中もしくは面接後に担当支援者に助言・提案をしていた。しかし、実際に家族と面接している担当支援者は背後にいる専門家チームが気になったり、専門家チームの提案は理解していても家族間のコミュニケーションに巻き込まれてうまく状況を動かせなかったりすることがある。一方、専門家チームはミラーの後ろにいて直接家族と面接していないにもかかわらず、指示や助言・批評をし続けるという問題点があった。リフレクティング・プロセスは、この一方的なワンウェイ・ミラー方式を双方向のワンウェイ・ミラー方式に変えたのである。最初に本人・家族・担当支援者との面接場面を専門家チームが観察し、次にミラーを切り替えて専門家チームの話し合いを本人・家族・担当支援者が一緒に観察するという往復のプロセスを数回経る。そうすることで、その相互性が治療関係の持つ階層性や権威性を減少させ、意味や解釈の多様性を生み出し、家族と治療者側との関係に変化をもたらしたのである。自分たちは常に会話をし続け、批評にさらされずに済み、離れたところで専門家チームの考えや意見をじっくり観察できる時間ができたのである。専門家チームが話し合っている場面を黙って聴いているときは、自分に答えを求められているわけでないので話された内容の意味を考えるようになる。また、終始会話にさらされないため即応性は求められず、自分の考えを整理し相手の考えを受け止める時間ができ、疑問がわき、同調することで自信もつき、自分たちで取捨選択して決めていけるようになる。つまり専門家が教える必要はなく、相互に「会話についての会話」をすることで響き合う対話が生まれ変化が生じるのである。リフレクティング・プロセスは、「聴く」と「話す」ことを交互に行うことで話し合いの外在化ができ、話題に対してメタな視点が生まれることが個人の省察性に通じるものと考えられる。

2. リフレクティング・プロセスに関する研究

(1)オープンダイアログとリフレクティング・プロセスとの関係

「リフレクティング」はオープンダイアログの中で使われる技法としても有名である。オープンダイアログとは、1980年代にフィンランド政府が社会システムとなっている「ニーズ適合型アプローチ」

の一環として地域ケアのために導入したものである。フィンランドの西ラップランドにあるケロプダス病院で統合失調症の初期の患者に対して始めたこの治療的取り組みは、当事者である患者と専門家が開かれた対話をすることで、患者を回復へ導くというものである。再発率も低く、多くのケースで薬物療法は用いられていない。具体的にオープンダイアログでの治療とは、電話で相談があれば24時間以内に専門スタッフが患者宅などに集まって患者・家族と共に対話し、これを何度でも繰り返すという治療方法(最小限の薬物療法)である。オープンダイアログで使われている技法の中に「リフレクティング」があり、患者や家族の目の前で、治療に関わる専門職同士が患者の治療について議論を行い、世界が注目するほどの治療効果を挙げている⁵⁾。

(2)リフレクティング・プロセスを用いた実践に関する日本の先行研究

以上のように精神科領域でリフレクティングを用いた治療が効果を挙げてきたため、研究も精神科領域がほとんどである。矢原は2008年から地域の精神保健福祉士とケアと学びの枠組みとしてリフレクティング・プロセスを活用し、RPP研究会(Reflecting Process for PSW)を立ち上げ、リフレクティング技法を用いたスーパービジョンや職種間連携、組織間連携などを研究しているⁱⁱ⁾。矢原・光岡らは、精神保健福祉士と他職種との専門職間連携を促進する手法としてリフレクティング・プロセスの応用を試みた。PSWと看護師とのカンファレンスの事例を通して、①「立場の旋回」による「専門職の階層性」の緩和、②「分けること」による「専門職の相互作用性」の促進、③「うつすこと」による「役割の解放性」の促進という3点のメタ・ポジションの涵養により連携の相互更新が促進されることが確認された⁶⁾。また光岡らは、比較的経験年数の浅いPSWで構成されている精神科単科病院において、「ある事例を担当しているPSWとその事例を知っているPSWチーム」と「残りのPSWと研究者のチーム」という2チームに分けリフレクティング・プロセスを用いた。そこではスーパービジョンに限定されないリフレクティングの有効性として①観察の観察による盲点への気づき、②コミュニケーションの切断による視点の広がり、③意識システムとコミュニケーション・システムの接続による主体的な学び、④チームメンバー相互の支え合いによる問題の解消が確認された⁷⁾。このほか、長沼は安心づくり安全探し研究会(AAA研究会)主催の高齢者虐待防止研修で、リフレクティング・プロセスを用いて相互に学び合う事例検討会の方法を提案している⁸⁾。

(3)リフレクティングを用いた実習に関する先行研究

国立情報学研究所の学術データベースCiNiiで2013～2017年にわたる5年間の〈実習 スーパービジョン〉の論文を検索すると24件あったⁱ⁾。多い領域の順番は、社会福祉相談援助実習、保育実習、精神保健福祉士実習、心理実習、介護実習であり、内容としてはスーパービジョンの機能やプロセス、教育効果などによるものが多く、次いでスーパーバイザーの課題であった。〈医療ソーシャルワーク実習 スーパービジョン〉にいたっては1件も検索に上がらなかった。また〈実習 リフレクティング〉と検索すると1件のみで、看護の臨地実習におけるリフレクティングケースカ

ンファレンスであった。次いで、〈ソーシャルワーク リフレクティング〉で検索したがあがらず、〈精神保健福祉士教育 リフレクティング〉と検索すると、2件あったが実習生に関する論文は1件だけであった。壬生らは精神保健福祉士を目指す学生が現場実習を行う前年度に精神保健福祉援助演習において「アズ・イフ」¹⁰⁾の応用を試みた授業を行っている。教員からみた学生の変化として顕著だったのは、①発言と質問の増加、②断定的な発言の減少、③自己開示の促進、④他者の意見への興味・関心の深まり、⑤事象を多角的にとらえる力の向上であった。また、事例の登場人物に自分を重ね合わせ心情を読み取ろうとする努力がみられ、より事例を深く考える助けになった⁹⁾。このほかに壬生らは、精神保健福祉士の実習生、現場の指導者、教員三者が一堂に会し、リフレクティング・プロセスの枠組みを活用し、学生らの実習体験の振り返りを試み、実習生へのリフレクティング・プロセスの応用可能性と効果を報告している。三者に共通する主たる気づきと学びは各々の立場での自らの行為(実習, 援助実践, 教育)への省察と視点の変化と拡大であった¹⁰⁾。

II. 研究目的

実習教育にリフレクティング・プロセスを組み込んだ先行研究が少ないことからわかるように、リフレクティング・プロセスを用いたスーパービジョンや教育はまだ始まったばかりである。リフレクティング・プロセスは他者の多様な視点や価値観を取り入れ、必ずしも問題解決のみを目的としない相互支援・相互教育であるため、対人専門職を目指す実習教育の場面でも有効に働くのではないかと考える。

三澤は『リフレクティング・プロセスのコミュニケーションに関する研究』¹¹⁾の中で、自由検討形式の話し合いとリフレクティング・プロセス形式の話し合いを比較検討した。自由検討形式の場合、「扇形コミュニケーション」が起きやすい。これはケースや悩み事に関しての情報を圧倒的に多く持っている発表者が会話に加わることで、参加者は発表者に不明な点をたずね、結果として「質問-回答」のパターンが生まれるということである。また、発表者の発言が「結論」として機能してトピックが終了し、次のトピックに移行するパターンが多いことが明らかになった。これは発表者が選択権を持っていることになり、他の参加者は同意したり言い換えたり補足したりする発言は行いにくくなるということである。つまり、そこでは発表者以外の参加者同士が話し合うことは自然と少なくなり、自由検討形式とはいえ比較的決まったパターンでの話し合いを展開しており、制限された会話になりやすいことがわかった。一方リフレクティング・プロセス形式の話し合いの場合、「扇形コミュニケーション」ではなく、「質問-回答」パターンは比較的少なく、1トピックに複数名が反応したり、全員が反応しないこともあった。自由参加型のリフレクション・プロセスでは付け足す発言が多かったり、求められたわけではなく自発的に同意を示したり他の参加者の言葉を言い換えたり、内容を

補足したりしながら小さなトピックが産出されやすくなり自由なコミュニケーションが生まれると考えられる。

そこで本研究ではMSW実習へ行く学生のグループスーパービジョンにリフレクティング・プロセスを取り入れ、通常のグループスーパービジョンの話し合いとの違いを学生の目を通して明らかにしていきたい。その上でリフレクティング・プロセスを用いることで学生の「省察性」が深まるのか検証していく。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象

本研究は、研究者である筆者が実践に参加し研究対象でもある参加型アクション・リサーチの質的研究である。

A大学では、3年夏期に相談援助実習、3年春期に一部の学生が精神保健福祉実習、そして4年夏期にMSWを希望する学生のためにアドバンスのMSW実習を設定している。研究対象はA大学4年のMSW実習を控えた学生5名と教員である筆者である。本研究で対象とするのは、2016年7月に「医療ソーシャルワーク実習指導」の授業内で実施したリフレクティング・プロセスを用いたグループスーパービジョンである。

2. 研究方法

(1) 場所

場所はA大学のセミナー室で、ワンウェイ・ミラーはないが、図1のようにお互いが気にならない程度に離れた場所で話を聴くことができるスペースはある。

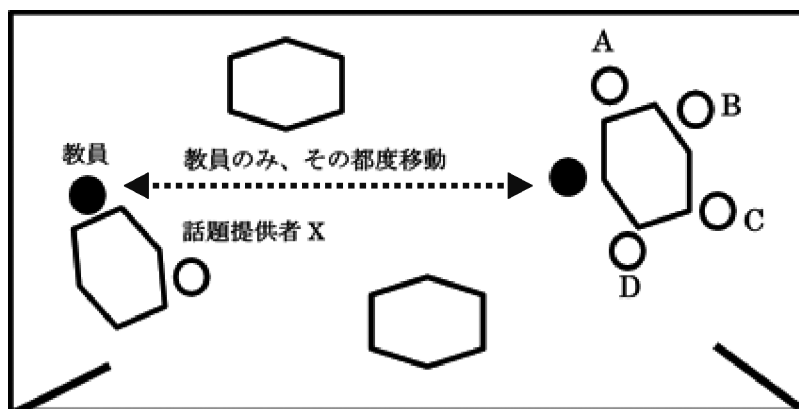


図1. リフレクティング・プロセス実施の配置図

(2)リフレクティング・プロセスを用いたグループスーパービジョンの手順

学生5名には「通常行っている同テーブルに全員が座る方法のグループスーパービジョンではなく、リフレクティング・プロセスという方法を用いてグループスーパービジョンを行う」と説明し、具体的な手順と方法を伝えた。この時点では学生はリフレクティング・プロセスというものが、どのような効果があると言われているのか知らない。教員からは学生自身の中に湧き起こったことや気持ちを大事にし、のちほど語ってもらいたいと合わせて伝えた。

本来、話題提供者Xと話す教員は、もう一方のチームに移動せずにいることが望ましく、別にファシリテーター役が必要だが、今回は授業内かつ初めての実践ということで教員がセッションごとにどちらにも移動し、ファシリテーターの役割も担った。実施手順は以下のとおりである。

① 図1の通り、まず話題提供者Xと教員が、Xが気になっているテーマについて会話をする(このチームを以下、ファースト・オーダーとする)。その様子を学生A, B, C, Dは少し離れた場所で黙って観察する(このチームを以下、セカンド・オーダーとする)。

② 次にセカンド・オーダーがファースト・オーダーの会話について観察しながら考えたことなどを自由に話し合い、その様子をファースト・オーダーであるXが観察する。このプロセスを繰り返す(計3回)。

*ファースト・オーダー 1回目:12分

*セカンド・オーダー 1回目:17分

*ファースト・オーダー 2回目:5分

③ 最後に全員でリフレクティング・プロセスを用いたグループスーパービジョンについての感想及び意見交換を行う。

*全員での話し合い:16分

④ ここからはICレコーダーに記録せず、学生がおこなったグループスーパービジョンを理論的に説明した。そのため、④からは分析対象外である。ここではすべて終了後にリフレクティング・プロセスの生まれた背景や意味、研究で明らかになっている効果を説明した(25分)。

(3)グループスーパービジョンのテーマ

話題提供者Xは、MSWを志望しておりMSWの求人を見つけて見学依頼の電話をした。そのときに、電話口でMSWから想定以上のさまざまな質問をされた。なかでも「なぜMSWになりたいか」と訊かれたときに、とまどってしまいうまく言葉にできず、自分はなぜMSWになりたいのだろうかと考えて悩んだということである。

3. 分析方法

ICレコーダーで記録したデータを逐語記録に起こし質的分析を行った。あえて語りのコード化はせず、語りの文脈や参加者の語りを詳細に記述することによってリフレクティング・プロセスで体験

した感覚を大切に残したいと考えている。一方、今回は研究者である筆者も参加しているアクション・リサーチのため客観性が必要である。グループワーク最後の場面で、皆でリフレクティング・プロセスの効果を話し合う部分がある。その部分のみ、筆者の主観的・恣意的解釈に依存しない方法としてテキストマイニングという手法を補足的に用いて確認作業をした。具体的には、逐語記録に起こした該当部分のテキストから自動的に頻出語を取り出し、その上でそれらの語の共起関係を探ることを通して客観性を担保し、リフレクティング・プロセスの効果を確認した。

4. 倫理的配慮

調査対象者には研究目的および研究方法、ICレコーダーでの記録について口頭にて全員に確認し同意を得た。また、個人情報保護の遵守と本研究に協力したことでの授業への評価の反映は行わないことを合わせて約束した。

IV. 研究結果

1. ストーリーライン

3回のセッションでの内容の流れを記載する。なお、斜字は実際に学生や教員が語った言葉である。

(1) ファースト・オーダー 1回目: 12分

今回話し合うテーマについて教員がXに話題提供の説明を求めた。

X: 金曜日に就職の見学のお電話をしたときに、「なんでMSWになりたいか」と聞かれて、まだあまりきちんと思いがなかったというか、自分の中でとまどってしまって自分がどうしてMSWになりたいのだろうと考えて悩みました。

教員が電話をしたときには咄嗟にどのようなことを考えたのか質問すると、Xは“MSWは研修が多いので自分のワーカーとしての資質を高めたいと思った”“保健医療サービス論の授業で興味を持った”“高齢・障害・児童などと1つの分野に特化せず幅広い支援をしたいと思った”というようなことを言葉を選びながら語った。そして電話が終わった後に考えたこととして、制度などを知らずに不利益を被ったりスムーズに次のステップに進めたりするようにMSWが道案内できると良いと思う、等と付け加えた。

教員はXが電話口で話した内容でも良いのではないかと思うが、なぜその説明だといけなかったのか尋ねると、

X:ん～。振り返ったときになんかちょっと自分中心、というか福祉やるんだったら相手のことを考えるっていかもって相手に対してこうしたい、ああしたいということがあるのかなと思ったのと、それをそのときにあまり伝えられなかったことと、授業でMSWになりたいっていうのはきっかけだったんですけど、なんかなんでMSWじゃないといけないの?と思って、こうだからという明確な理由が今ないなと思って…、そこで最初に電話でワサワサしちゃったっていうのも理由なんですけど、明確な理由がないっていうのがそのあと自分は何がしたいんだろうって…

と語った。このあと、教員がXは以前公務員とMSWとで進路を悩んでいたのではないかと話をふると、いろいろ考えると公務員は制度に縛られているような感じがしてしまい自分には合わない、続いて障害、高齢、児童、精神の領域についてXの考えていることやイメージを語っていった。Xが高齢者分野の実習では仕事にしたいところまでは興味が湧かなかったと話をしたときに、教員が医療機関に入院している患者は高齢者が多いという話をした。するとXはしばらく考えて以下のよう話した。

X:ん～…なんか病院はご本人もだけど、ご家族の支援みたいのがあると思うので、ケアプラザだと本人の支援で、家族が本人を支援するのは見たんですが、家族の支援というところまでは見られなくて、私は家族支援に興味があるんだと思う。

(2)セカンド・オーダー 1 回目:17 分

教員が話題提供の背景を簡潔に説明し、ファースト・オーダーの話を聴いていてどう思ったか自由な感想を促す。

A:自分もいきなり志望動機を聞かれると困ります。やっぱり自分もそんなに志望理由を明確にしよって思っていなかった。でも言われると出てきます。自分だったらこうって…

と口火を切った。Aは家族が大病をし、そのときのMSWの対応に家族が傷ついたので自分もMSWになったら絶対に家族にそんな思いをさせたくないと語る。大病するまではMSWはかっこいいなという軽い思いでいたが、なりたい気持ちがあったため授業もきちんと受けて、その中で結構難しい職業だということもわかってきたことを説明してくれる。次にCが、

C:私もXさんのように電話口で急に聞かれたらびっくりしちゃうし、きつといい答えを出さなきゃって自分なりにいろいろ考えこんじゃうタイプなんで、その場で浮かんだことをパッと言っちゃうだけでそのときはきつうまく答えられないと思うんですけど、自分自身はMSWになりたいなって思った理由は、最初保健医療サービスの授業を受けて、(中略)…そこから興味をもって、もともと自分は地域で人

とかかわる仕事がしたいなっていうのがあってAさんも言っていたように、できるだけ高齢・児童・母子っていうように対象者を限定せず、いろんな人の何かお手伝いをしたいっていうのと、その人たちにもいろいろな価値観があると思うので、いろいろな背景がある中で築かれてきた…そういうのを自分も知りたいなって思ったのが最初だったんですけど、医療の現場って自分が思っていたよりもシビアだし感情も揺れ動くこともありますし、死に近い方のことにも対応しなければならないし、思っていた以上に過酷なんだなっていうところでは、まだ自分がそれに向いているのかは正直わからないんですけど、でもなんだかやってみようかっていう気持ちはあるので、今はやってみようかっていう気持ちで目指したいなと思っています。

と語った。Dは、Xが電話をしたときにそばにいた学生で、そのときの様子を語ってくれた。そして自分がどのように考えたのか、自分がなぜMSWになりたいと思ったのか家族について話をしてくれた。

D:(中略)私はそもそもMSWになりたいなって思ったのは、高校生のときに母が倒れて心筋梗塞で入院して医療費で困ってというのがあって、そのときはとなりに入院していた方が高額療養費っていうのがあるんだよって教えてくれて対応できたんだけど、私の母は外国人で病院で苦勞していることが多くてちゃんと対応してもらえなかったりとか言葉が通じにくかったりとか、病院でみんな体が悪いから行っているのに、医療を受ける以外のところでつまずいちゃうことがあって、お金のこととか医師との関係性だったりとか、そういうので病院に行きたくないってなったらとてももったいないことだと思うし、この先、制度を使ったら助かるのに楽に進めるのに、こんなところで受診拒否になったらもったいないなって思うから、病院で支援拒否にならないように救い上げられたらいいのになって思った。それから私も精神の実習へ行ったらけど、私は合わないな・無理だなって思って、高齢も包括に行ったら楽しいなとは思ってたけど、高齢だけ障害だけってなるとやっぱり違うなと思ったから。だからMSWじゃなきゃだめっていうのはないけど…MSWなのかなって。

最後にBも自分の家族の病気について語った。Bの場合はAとは異なり、MSWに支援を受けたことでの感謝と憧れの話であった。

B:(中略)そういう経験をしたからこそ、そういう人になりたいって思って、病院に来る人は病気だからそれによって環境が変わったり自分の役割が変わったりするので、喪失体験を必ずする場面でもあるのかなって思って。でも喪失だけでなくこれからの生活の中で希望もあるんだよということ伝えられるMSWになりたいと思っています。

さらにBは自分がMSWの志望理由をきちんと考えたきっかけもX同様に就職先に提出する小論

文を書いたときであり、そのときに自分はどんなMSWになりたいのだろうと改めて考えたため、Xのように急に電話口で聞かれたら自分も絶対に慌てるし焦って緊張してしまうとねぎらった。教員が皆の志望理由を改めてこの場で聞き、それぞれに思いがあることを再認識したと伝える。そしてXはいくつか実習を終えて、消去法というわけではないが、自分に合う分野を考えているようだがそれについてはどう思うか聞くと、

A: 他と比べて…ん～。MSWって知的障害とか精神障害とか高齢とかさっき出てきたんですけど、MSWだけにあるなっていうのが1つあるとっていて、いきなり生活・人生が変わった人と面接というか、支援をするというのはMSWだけなんじゃないかと思っていて、高齢だったら、段階を追って老いていくし、知的も大体が早い段階でわかってその人たちを支援したり、精神も家族があれば、なんかおかしいなと思って支援が始まったりするけど、突然の病気で倒れたりだとか交通事故だとか、状況が何が起きているのかパニックになっちゃってる人たちと向き合うのがMSWであって、そこにMSWの意味があるのかなって今考えました。違っていていうか、仕事内容っていうか、かかわり方っていうか、他と何が違うのかっていうことをはっきりすれば、なんでMSWじゃなきゃいけないの?と言われたときに言えるんじゃないかなと

教員: Xさんは、たぶん急に「なんでMSWになりたいの?」と聞かれてパツと答えられなかった自分に、あれ?自分って…とって自分の中で混乱したのだと思うんだけど、BさんやCさんも言っていたけど、急に質問されて答えられるもの?

A,B: つまる。

C: つまる。私も絶対パニック。

D: いや～私横にいたけどあれは慌てる。ただでさえ緊張しているのに…Xさんかなりショック受けていた。

教員: そうなんだね。私は詰まったことがXさんはショックだったのかなって。わざわざオプションのMSW実習へ行くっていったのに、はたと自分はそこに立てるんだらうかと思ったのかなって。でも今皆の意見を聞いてるとDさんは近くで電話を聴いてこれはやばいって思った、自分もそこまで深く考えてなかったって言っていたし、Bさんは就職先への小論文を何回も添削していて、その中で徐々にかたまっていて、そういう時期ってあるのかなって思いました。

D: なんでMSWがいいの?って聞かれたら浮かぶんですよ。これとかこれとかって。じゃ、なんでMSWじゃなきゃいけないの?って言われたら思い浮かばない。

B: なんでMSWじゃなきゃいけないの?は、たしかに難しい。

C: 難しい

B: なんでになりたいの?なら出るんだけど、たしかに私も詰まっちゃう。

A,C,D: うんうん

教員: Xさんは、「なんでMSWになりたいの?」って聞かれたんだと思うんだけど、考えていく中で

「なんでMSWじゃなきゃいけないんだろう」って自分の中で思ったんだと思うんだよね。

A,B,C,D: ああ!

この場面はセカンド・オーダーの全員が矢継ぎ早に話すため言葉が重なることが多かった。また、他の学生の語尾を一緒に言ったりすることが多くあり盛り上がった。このあと学生たちは深く考えることは良いことで、夏のMSW実習前にMSWになぜなりたかという自分なりの今の時点での答えとして出しておくっていうのは大切だと思う、Xがきちんと考えようとしていると思った等と皆が口々に意見を言ったりXのことをほめたりしていた。

(3) ファースト・オーダー 2 回目: 5 分

セカンド・オーダーの話聴きどのように思ったのかXに尋ねると、自分の家族は倒れた経験はないため実体験からMSWになりたいわけではなかった、家族が倒れた経験のないCと似た感覚だと思って聞いていた。そして話を聴く中で喪失という言葉で自分もそういう何かしら失った人に対して道筋みたいなものを立てていける人になりたいなと思ったと静かに考えながら答えた。教員がほかにどのようなことを考えたのか促すと、

X: 今話を聴いて、家族側の話を聴いてつらい思いをしたとかこうだったら良かったのに、という話があったので、(中略)なるべくその人ときちんと向き合って、ご家族とか本人につらい思いをさせないというか、嫌な思いとかされないようなMSWになれたらいいなって思いました。家族支援…。あと、Aさんが言っていたこと…MSWならではっていうこと…突然の生活の変化とか人生の変化とか、そういうところに携わることの大切さかな。

教員: そうなのね。向こうのチームが「なんでMSWになりたいの?」と言われたら言えるけど「なんでMSWじゃなきゃいけないの?」と言われたらわからないって言っていたけれど、それは聞いていてどう?

X: たしかに。私は最初電話で「なんでMSWになりたいの?」と聞かれて、その電話でそうじゃなきゃいけない理由を探していたなって。実際自分の家族が倒れたわけではないから、実体験があったらそのまま直で言えたのかなと思うんですけど、それがなくて授業とか取っている中でなんでなりたかろうとか少しは考えていたんですけど、あんまりこれという考えもなくって悩んでいるときに聞かれたのでハッとしたのもあって、その場で考えて、なんでMSWじゃなきゃいけなかったんだろうって勝手に思っちゃって、たぶんそれで詰まったんじゃないかなって。月曜日に先生と話しているときに、電話よりも素直に言えたっていうか、電話は緊張して混乱してたっていうのもあるんですけど、先生のところで話した時は言えたのに、なんで電話で言えなかったんだろうって気になっていて、今向こうのチームの話聴いていて、勝手になんか重く自分は解釈しちゃったのかなって思いました。

教員：そうなんだね。今の気持ちはどう？

X：ん～。意外と大丈夫だったのかも。皆そう思うのかって。私真面目に考えたなって。

教員：私もそう思いますよ。今リフレクションしたんですが、向こうのチームのみんなに言いたいことがあれば…気づいたことを改めて。

X：笑！ん～なんかみんな自分の思いを言語化するのがうまいなと思った。結構聞いていて、自分もそういうふうを考えていたわ、ということがいっぱいあって、志望動機はCさんと近いなと思って、なりたい自分のことをCさんがうまく言語化してくれたなあって。ああ、そういうことを自分は考えていたんだっていうのが感想です。

教員：そうですね。ありがとうございました。

(4) 全員での話し合い：16分

教員より、Xの悩みは全員がこれから実習先や就職で訊かれることかもしれない、今回Xが出してくれたテーマについて皆がそれぞれ考えたと思うが、話し合ってみてどうであったか感想を聞いた。

C：ん～(中略)私もずっとMSWになんでなりたいのか悩んではいたんですけど、なかなかその答えっていうのは一言では出せないし、出せないんじゃないかなという思いで、それでもいいのかなというふうに思っています。でも自分がやりたいっていう思いであったり、なんだろうなあ、でもなりたいていう思いだけではできないってこともわかっているし、きっとMSWじゃなきゃいけない理由を自分で探したいとかそれなりの覚悟をしたとか、覚悟をもって行きたいっていうこともあると思うので、そのへんではまだまだモヤモヤすることもあるんですけど、今の自分のなかにある思いや考えは素直に伝えていけばいいのかなと思いました。それとみんなも同じように悩んでいるんだなと思って、なんか共感というか嬉しかったです。

B：(中略)たぶん実習へ行ったらそれぞれ体験をすれば変わることもたくさんあるんだろうなとも思った。答えがないからこそ、そのなかに自分らしさが出せればいいなと思いました。新鮮で楽しかったです。

A：考えを改めて考える機会になって、改めてなんでMSWになりたいのかだけでなく、なんでMSWっているんだろうって、職場に出てもずっと悩むことだと今話しながら思った。でも今の自分、現時点での自分のなかで明確にしておく、他人になんでMSWになりたいの?とか、なんでMSWっているの?って聞かれたときに、はっきり答えられるようにしておくことが大事かなって思いました。

D：私はなりたい理由は浮かぶってさっき言ったけど、本当は箇条書きみたいにしかならないから、ちゃんとまとまりきっていないんだなとすごく思った。それとみんなの思いを聴く機会ってなくて、Aさんは老健に行くと思っていたからMSWなんだと思ってびっくりしたのもあったし、自分が

MSWをどう思っているのかっていうことを話す機会ってなかったからすごく楽しかった。それと
思っていたけど自分の中でうまく統合できないっていうか、言葉にできていなかったことが、みんなの話を
聴いている中で、こういうふう言葉にすればいいんだとかこうだこうだと確認したりできた。

教員：そうですね。それを聴いてXさんはどう？

X：そうですね。そのとおりだと思った。聴く機会なかったから新鮮だったし、聴けて良かったな。
なりたい自分は少しずつ形作られるのかもって。

以上のようなやりとりがあったあと、教員がXが相談をしに来たときの混乱ぶりを振り返ると、Xは
そのときの自分の様子を思い出して身振り手振りで興奮気味に話をした。考えが固まっていないの
は自分だけなのだろうか、自分はダメなのだろうかと考えたが今ではよく絞り出して言葉にしたと思
うと言った。

最後に《リフレクティング・プロセスを用いたグループスーパービジョン》についての感想をたずね
た。以下の部分は、参加者が感じたリフレクティング・プロセスの効果でもあるためそのまま掲載
する。省察ができていない部分や省察につながる大事な言葉には波線を引いた。

X：ん～、そばにいないから視線もないし、言いたいことが言えるっていうか、なんていうのかな、
なんか客観的というか、そういう意見もあるなって冷静に受け止めるっていうか。たぶん同じテーブル
にいたら、話を合わせてあぁ、そう、ん～って共感しなきゃとか思っちゃうけど、冷静に聴けた感じ。
存在があるのとないのとではなんだか違う。心配りするほうに気持ちがいっちゃって、そうだよねそ
うだよね、ってしなきゃっていうのがないから、内容にしっかり入ってことができた。話が聴けた。

教員：そうですね。4人はどうでしたか。話題提供のXさんがいないところで話したけれど。

A：考える時間がちゃんとあるから良かった。一緒のテーブルにいと、いろいろ考えてしまうけれ
ど、離れていると1人でそれについて考えて、それぞれ4人が落ち着いて冷静に自分の中で考
える時間になっていたと思う。

教員：同じ話を同じテーブルでしていたら落ち着かない？

A：ん～言いやすさとか。本人がいないというのがいい。ここに一緒にいて情報共有すると、突
発的によく考えないで言葉を言ってしまいそう。話の腰を折っちゃったり。でも離れていたから一回
その言葉を飲み込んでまとめたうえで言える。答えられる。

B：今回のやり方だと、Aさんが言ったように考えをまとめられるっていうのもあるんですが、アドバ
イスにならないのかがいいのかなと思った。自分の思いも自分で認識できるし、それを遠くで聴いてく
れているというのもXさんにとっても自分たちにとっても何かそれぞれの考えにつながればいいのかな
と思った。

C：二人が言ってくれたように、Xさんが言っていたけれど冷静に話を聴いて自分の中で自分もそ
う、そこは違うかなとか考えてから話せた。普段私はゼミなどでグループで話すときは周りのことを

気にしちゃうタイプでいろいろ考えこみすぎちゃって何言えばいいんだろう, どういうことを求められているんだろうってそういうことばかりを気にしちゃうけれど, ちょっと場を離れてやることで自分も整理しやすかったし, 本音の意見を言いやすかったように感じる。なんかいっぱいしゃべっちゃった気がする。

D: 近くにいないからこそ, Xさんが何に悩んでいるのかなと真剣に聴こうと思った。Xさんがどうしてそんなに悩んだのかときちんと聴けたような気がする。黙って聞いている中で, Xはこういう感じだったのか, とか自分の中で整理することができた。状況がわかりやすく感じたし, 自分だったら, 自分だったら, といつもより考えたように思う。

教員: 今はみんな一緒にいるから存在感あるけどね。

ALL: 笑

X: 存在消したい。なんか話し合う話題が一緒でも, スーパービジョンのやり方できつと違う。今日はみんながよくしゃべってくれて良かった。離れているのになんか情報交換?ていうのかな, しゃべった感じ。それに聴いているときに相手の話もだけど, 自分の気持ち?考え?をメモしてた。

C: わかる。私も自分が何思ったか, 次何言うか書いていた。

B: 私も書いていた。 (中略)

X: なんかもういいや。悩みすぎたな。だってこれから実習だもん。そこで自分なりに感じる気がしてきた。 (以下省略)

2. リフレクティング・プロセスの効果

(1) テキストマイニングでの補足

本研究では, 語りの文脈や参加者の語りを詳細に記述することに焦点を当て, 読み手にも自由に解釈をしてもらう余地を残しているため, あえて語りのコード化はしなかった。しかし, リフレクティング・プロセスの効果を客観視するために, 研究手順③全員での話し合いの後半部分《リフレクティング・プロセスを用いたグループスーパービジョン》についての感想のところをテキストマイニングという方法を用いて分析を行った。具体的にはKH Coder³¹²⁾を用いてデータの中から自動的に語を抽出し, その中でも多く出現していた語を確認。その上で語と語の結びつきを探るための共起ネットワークを作成した。

(2) 頻出語の確認および共起関係

KH Coder³を用いて前処理を実行し, 文章の単純集計を行った結果, 84の文が確認された。また, 総抽出語数(分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数)は1,632, 異なり語数(何種類の語が含まれていたかを示す数)は354であった。さらに助詞や助動詞など, どのような文章にでも表れる一般的な語を除外し, 分析に使用される語として569(異なり語数229)を抽出した。これらの頻出語のうちの出現回数3回以上の語とその出現頻度を表1に示す。

表 1. リフレクティング・プロセスを用いたGSVにおける頻出語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	X	17	15	楽しい	5	30	サービス	3
2	思う	15		笑	5		改めて	3
3	言う	14		話す	5		感じ	3
	自分	14	A	4	感じる		3	
5	考える	10	B	4	気		3	
	聴く	10	C	4	考え		3	
7	教員	9	テーブル	4	使う		3	
8	医療	7	違う	4	時間		3	
	制度	7	学生	4	書く		3	
	話	7	気づ	4	人		3	
11	ALL	6	向こう	4	存在	3		
	一緒	6	自身	4	聴ける	3		
	保健	6	入る	4	答え	3		
	離れる	6	冷静	4	悩む	3		
	MSW	5	やり方	3	落ち着く	3		

次に「共起ネットワーク」のコマンドを用い、話し合いの中で出現パターンの似通った語を線で結んだネットワークを描いた。なお、分析にあたっては出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を3に設定し、描画する共起関係の絞り込みは描画数を60に設定した。強い共起関係ほど太線で、出現頻度が多い語ほど大きな円で描画されている。図2に共起ネットワークを示す。下線はネットワーク内の語をあらわす。

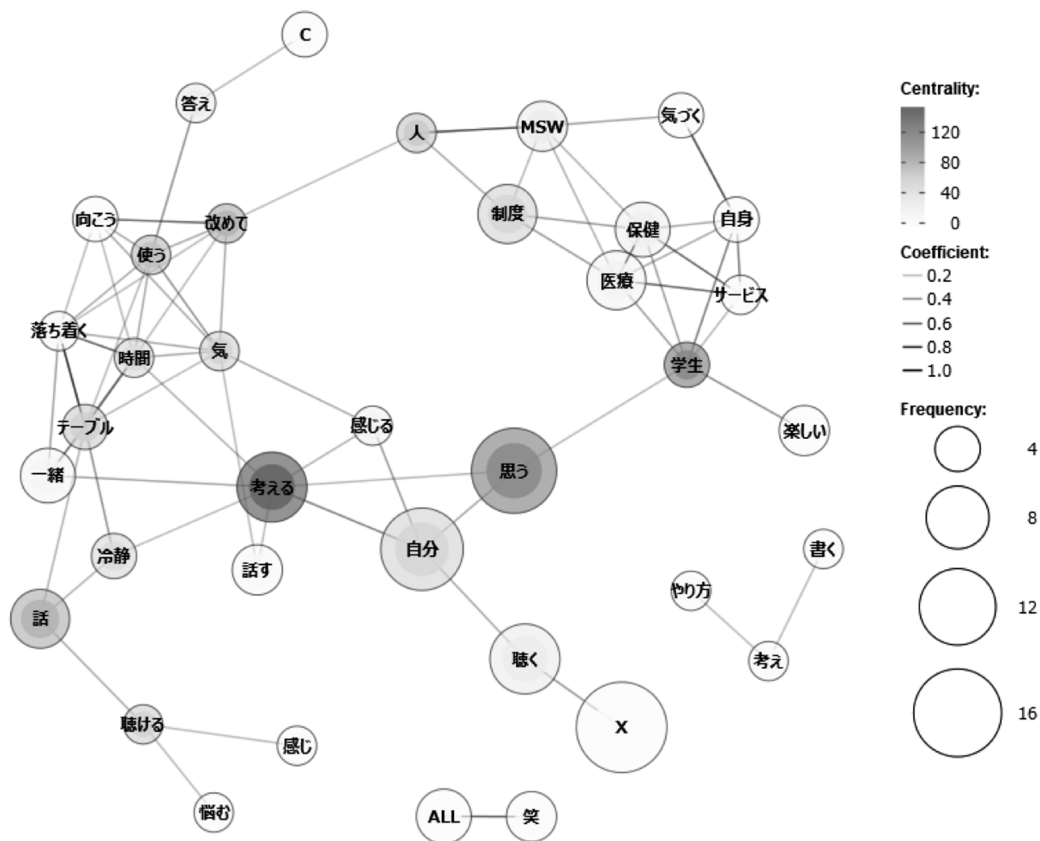


図2. 共起ネットワーク (RPを用いたGSVの感想)

まず、大きな円に注目しながらネットワークを見ていく。Xの話聴きながら自分の中で思ったり考えたりして話していることがわかる。これは話題提供者Xから離れていることで冷静に話を聴いていると考えられる。これにかんしては、考える時間があることで落ち着くということ、そして話題提供者に気をつかうことがないことにもつながっている。また、話を聴きながら、自分の考えを書く行為を3人がしていたことは注目できる。

図2の右上に保健医療サービスの授業に関する内容が描かれているが、これは学生が保健医療サービス論の授業を楽しんでいると感じることでMSWに興味をもつきっかけになったことが話題にあったことである。保健医療サービス論は社会福祉士国家試験の指定科目であり制度論である。医療保険制度や診療報酬制度、医療法や保健師助産師看護師法、医療ソーシャルワーカーの業務指針など制度や法律が盛り沢山のため、教員は学生に理解してもらうのが難しい科目だと感じていた。今まで学生から「保健医療サービス論に興味をもって」という言葉は何度も聴いてきたが、それは保健医療サービス論の中で1~2回MSWの業務内容を説明するところに学生の関心が集まっていたと思っていた。しかし今回の話し合いで制度自体が面白くスムーズに頭に入ったか

ら楽しいと感じたということを知ることができた。そして、その話の際に学生側から他の科目の制度論は苦手のため、得意不得意があり、保健医療サービス論に苦手意識がなく、スムーズな理解ができた場合、楽しいと感じ、MSWへの関心が高まることが確認され、教員・学生双方が新たな気づきを得た。

V. 考 察

本研究ではMSW実習へ行く学生のグループスーパービジョンにリフレクティング・プロセスを取り入れ、通常のグループスーパービジョンの話し合いとの違いを学生の目を通して明らかにし、リフレクティング・プロセスを用いることで学生の「省察性」が深まるのか検証してきた。

話題提供者Xは、就職希望先の病院に電話をし、「なぜMSWになりたいのか」と問われた。うまく言葉にできなかったと思ったXは考えていく途中で「なぜMSWになりたいのか」から「なぜMSWでなければいけないのだろう」と変化していた(本文なんでMSWじゃないといけないの?)。しかし、当初本人はそのことに気づけていない。MSWの実習を控えた段階でそこまで自分を追い詰めることはないのだが、MSWについて深く考える良い機会になると考え、全員が自分自身と向き合う省察の機会を作るべく、リフレクティング・プロセスを用いた。

通常と同じテーブルに座ってのグループスーパービジョンとの違いは、Xの「話し合う話題が一緒でもSVのやり方できっと違う」という最後の言葉からもわかるように、学生自身がスーパービジョンから得るものが違うことを感じ取っていた。同じテーブルの話し合いだと話題提供者も参加者も双方に気がつかない、うなずきやあいづちをして共感を表そうとする。それはそれで良い面もあるのだが、そこを気にするがあまり実は集中して相手の話を聴けていなかったり深く考えていなかったり、次に話そうと思っていたことを忘れて飲み込んでしまったりすることがある。しかし、今回のリフレクティング・プロセスでは学生それぞれが集中して話を聴き、また自分自身の中での対話をする中で省察していることは本文の内容(波線)からも見て取れる。〈冷静に受け止める〉〈離れていると一人で考える〉〈落ち着いて冷静に自分の中で考える時間〉〈一回言葉を飲み込んでまとめた上で言える〉〈自分の思いを自分で認識〉〈自分の中で自分もそう、そこは違うかな〉〈自分だったら、自分だったらと考える〉〈聴いているときに自分の気持ち?考え?をメモしていた〉〈自分が何を思ったか、次に何を言うか書いていた〉などは省察している証である。また、学生は「なぜMSWになりたいのか」から最終的に「なぜMSWがいるのか、MSWは必要なのか」というMSWの存在意義を考えるまでに至ったことは大変意義深い。壬生らが精神保健福祉援助演習でおこなった¹³⁾「アズ・イフ・ワーク」の応用授業で観察された「事象を多角的にとらえる力の向上」や「自己開示の促進」「他者の意見への興味・関心の深まり」などは今回の研究でも顕著に現れた。

リフレクティング・プロセスは相互に「会話についての会話」をし、それぞれが内的対話をするこ

で省察が深まり、お互いに響き合う対話が生まれる。本研究でも「聴く」と「話す」ことを交互に行うことで話し合いの外在化ができ、話題に対してメタな視点が生まれることがわかった。実習生同士のリフレクティングを用いたグループスーパービジョンは、専門家とクライアントが行うリフレクティングのそれとは様相が異なる。ピアな関係を使いながらリフレクティング・プロセスを応用し、グループスーパービジョンをすることで、学生の受けとめの変化や視点の広がりが進むと考えられる。

本研究では、授業内実施ということで参加型アクション・リサーチ方式を採用し、別にファシリテーターを設けずに教員がファースト・オーダー、セカンド・オーダー双方の対話に入ったが、これについてはメリット・デメリットがあると考えられる。メリットはファースト・オーダーのXが一人になる時間を与えられたことにある。たとえ黙っていても教員と二人でセカンド・オーダーの話を聴くのは気になるものである。一方デメリットとしては、双方とも教員を介していることでファースト・オーダーとセカンド・オーダーをきちんと切り離れたものではなくなくなっていたかもしれないという点である。慣れてきたら教員は司会や手順を説明する役割に徹してファースト・オーダーも学生同士、セカンド・オーダーも学生同士で全体を教員がコーディネートするという工夫もできるのではないかと考えた。さらに、今後の課題としてはビデオなどでの録画をし、観察からより効果を精査してリフレクティング・プロセスを用いた実習指導への応用を深めていきたい。

〈注〉

- i) 国立情報学研究所学術データベース, <http://ci.nii.ac.jp/2017/11/05>
社会福祉士相談援助実習に関するものが10件, 精神保健福祉士に関するものが5件, 保育実習に関するものが4件, 心理実習が2件, 介護実習が1件, その他歴史に関するものなどがあった。
- ii) RPPとは, 精神保健福祉士教育のための新たなシステムのモデル構築を目指す実践および研究のプロジェクトである。
- iii) 「アズ・イフ」は, トム・アンデルセンのリフレクティング・プロセスと相互に影響し合っているハーレン・アンダーソンが提唱したワークで, 「まるでその人物であるかのように」という立場でグループごとに意見交換を行い, 振り返りをおこなうワーク。

〈引用文献〉

- 1) 野口裕二：物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ—, 医学書院, 2002, p220.
- 2) 壬生明日香, 矢原隆行：精神保健福祉士教育におけるリフレクティング・プロセスの応用—現場体験での学びを深めるためのアズ・イフ・ワークの試み—, 精神保健福祉, 40(2), pp.155-161, 2009.
- 3) 矢原隆行・田代順編：ナラティブからコミュニケーションへ—リフレクティング・プロセスの実践, 弘文堂, 2008, p208.
- 4) トム・アンデルセン (著), 鈴木浩二 (翻訳)：リフレクティング・プロセス—会話における会話と会話—, 金剛出版, 2015, p176.
- 5) 斎藤環：オープン・ダイアログとは何か, 医学書院, 2015, p208.
- 6) 矢原隆行他：精神保健福祉領域における連携促進手法としてのリフレクティング・プロセスⅡ—実践事例を踏まえた理論的考察—, 精神保健福祉, 41(3), p188, 2010.
- 7) 光岡美里, 知花絵美, 川田恵他：精神保健福祉領域におけるリフレクティング・プロセスの応用—スーパービジョンに変わる支え合いのコミュニケーションの可能性—, 精神保健福祉, 精神保健福祉, 42(2), pp.139-140, 2011.
- 8) 長沼葉月：安心づくり安全探し研究会(AAA)主催の2015研修会での配布資料
- 9) 前掲2)
- 10) 壬生明日香, 矢原隆行：精神保健福祉士教育におけるリフレクティング・プロセスの応用Ⅱ—現場の精神保健福祉士を交えた実習の振り返り—, 精神保健福祉, 40(3), p227, 2009
- 11) 三澤文紀：リフレクティング・プロセスのコミュニケーションに関する研究, 茨城キリスト教大学紀要, No.42, pp.257-268, 2008.
- 12) 樋口耕一：KH Coder Index Page(2017年11月10日取得)<http://khc.sourceforge.net/>
- 13) 前掲2)

〈参考文献〉

- Andersen,T.(eds.), The Reflecting Team:Dialogues and Dialogues About the Dialogues,Norton, 1991,p208.
- 内田充範：日誌から探る実習スーパービジョンの実際―実習指導者としての社会福祉士の役割―，山口県立大学学術情報社会福祉学部紀要，No.6,pp.17-26, 2013.
- ショーン・ドナルド，柳澤昌一，三輪健二監訳：省察的実践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考，鳳書房，2007，p440.
- 三澤文紀：リフレクティング・プロセスのコミュニケーションに関する研究②―情報の均衡・不均衡がチームのコミュニケーションに与える影響―，茨城キリスト教大学紀要，No.43, pp.191-202, 2009.
- 南出裕美子：「プロセスレコード」を活用した実習スーパービジョン―通信教育課程の事例から―，福祉教育開発センター紀要，No.14,pp.151-161,2017.
- 矢原隆行：会話についての会話と観察の観察，人間科学共生社会学，No.6, pp59-71, 2008.
- 矢原隆行：リフレクティング―会話についての会話という方法―，ナカニシヤ出版，2016.
- 山田妙詔：精神保健福祉援助実習後における実習教育に関する考察―ピア・スーパービジョンの試みを通して―，日本福祉大学社会福祉論集，No.136, 2017.